

---

# 二千九百九十九番目の物語

デス=クトップ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二千九百九十九番目の物語

### 【Nコード】

N4634Z

### 【作者名】

デスクトップ

### 【あらすじ】

現代ファンタジーの皮をかぶった異世界ファンタジーです。

見所は、キモチワルイ主人公、無駄な足掻きをするキャラクター達、もはや記号と化したヒロイン群、といったところです。うそです。見所は、目新しい気がしなくもない世界観といったところです。

緩く連載していくので、どうぞお付き合ってください。

## ある聖職者の手記から抜粋

滅びは約束されている。

三千世界を作り出したウーヌスがそう言い残したという事実に、異議を唱える宗教家はいないだろう。

もちろんその滅びが何を意味しているのかについては、意見が分かれるところではあるだろうが。

私見を述べさせてもらおうとするなら、

〈中略〉

ウーヌスは遍く三千世界のすべての事象を予見していた。

世界も、時間も、そして命も超越した存在であるのだから、それは当然かもしれない。

そのウーヌスが滅びを約束したというのならば、我々人間ごときがそれに抗うことは不可能なのだろうか。無意味なのだろうか。

私はそうは思わない。

何故なら、

〈後略〉

## 序幕

そして気がつけばまた体が十二年ほど若返っていた。  
ハッピーエンドは難しい。

\*\*\*

その日発売されているはずの週刊少年誌を立ち読みしようと思っただけだった。最寄りのコンビニエンスストアは家から歩いて五分ほど。目をつぶっていたってたどり着けるほどに歩きなれた道だ。

だからそれはほんの偶然。

突然強い風が吹いたのも偶然。

僕の隣を歩いていた男の人が持っていた書類をバサバサと落とすたのも偶然。

それを横目でチラリと見た僕の目が、その向こうに路地裏を捕えたのも偶然。

だから、その暗がりには僕の目が釘付けになっただけのはただの偶然に過ぎなかった。

そんなところにこんな細い道があるなんて。長い間この町に住んでいるが、意識したことはなかったと思う。ましてそこに足を踏み入れようなんて。

一言で表すなら。

違和感。

もしくは期待。

戯れに求めたものとはいえ杳としてつかめないこの物語の結末、  
それにつながる何かがあるような気がして。  
そして僕は初めてこの日にそこに入った。  
そして僕は初めて彼女に出会った。  
彼女はいつでもここにいたのだろうか。  
僕はそんなことを考えていた。

## 第一幕 前

七曲町には、ななまがりちょう中等学校は一つしかない。七曲中等学校。そのままだ。何のひねりもない。さらに初等学校名も七曲初等学校なのだから救われない。とは言え、この名前は誰がつけているのだと聞かれれば、歴史と伝統をことさら大事にしているここ極東行政区画のお偉方なのだから、面白い名前を期待する方が間違っているのかもしれない。

七曲中等学校に入学して一年と二か月。ちょうど三百三十三回目となるそんな思考をなぞりつつ、僕はトレイを片手に取った。

コの字型の校舎の中庭に面した食堂、放課後である。昼休みにはさながら飢えたイナゴのように人がごった返すこの場所も、それから三時間弱過ぎただけでこの通り。人気のかけらもない。食堂自体は部活に精を出す連中のために完全下校時刻直前までやっているのだ。入学した僕が昼休みの食堂の惨状を見て、三時間の空腹くらい我慢しようとそう結論を下すのは当然のことだった。

さて、今日は何を食べようか。

長時間のお預けをくらった僕の胃袋は、先ほどから早く食い物によこせと大合唱をしている。それも当然で、昨日の夜はちよつとした面倒事をかたづけていたため夕飯を口にしてはいないのだ。当然朝食なんて上等なものを食べる習慣は持っていないので、実はおよそ二十四時間ぶりの食事だったりする。

そうなつてくるとここは豪勢にC定食なんていつてみたい気がするが、これからのことを考えるとあまり金を放出しない方がいい気もしてくる。月末にパンの耳をかじって飢えを凌ぎつつ奨学金を待つ生活はもう御免なのだ。

「……定食系は諦めるか」

後ろ髪をひかれながら、僕は隣の麺類コーナーへと足を向けた。

豪勢プランをあきらめたとはいえ、僕が今現在常日頃にならないほど

カロリーを欲していることに変わりはない。つまり目的は質より量プランである。

麺類コーナーでしばらくメニューを睨みつけた僕は、「素うどん三つで」と注文した。受けたおばちゃんは不審そうに食堂を見渡した後、何も言わずに二つのどんぶりを出してくれた。どうでもいいが、パシリにされたとても思ったんだろうか。一日に七百食以上もの注文をさばくおばちゃんをもってしても、一人で素うどん三つというのは珍しいようだ。

トレイいっぱい三つのどんぶりを無理やりのせて支払いを済ませる。素うどん三杯で五百四十円。C定食が六百三十円であることを考えると、素晴らしいコストパフォーマンスだ。

僕は満足してひとつ頷くと、レジから程近い食堂の片隅の席に座った。

「いただきます」

小さくそう呟く。食前の祈りは唱えない。習慣というものは、いつまでたっても抜けられないものだ。

割り箸を手に、まず一口すする。

うん、うまい。

空腹時に食べる食事は、どうしてこんなにうまいのだろう。この分だとどんぶり三杯の素うどん、案外おいしく食べ切れるかもしれない。麺だけならばともかく、こっちには刻み葱もついているのだ。この白と緑のコントラストの美しさを見てみるといい。

時間が経つにつれ麺が伸びてまぶさなくなっていくうどんの性質から目を背けて、僕はただ一心にすすり続けた。

そして。

「や、どうも」

どんぶりにのみ意識を傾けていた僕の前に彼女が座ったのは、ちょうど一杯目を半分ほど消化し終えたかどうか、といった時だった。「ちよろつとごめんね」

言って割り箸に手を伸ばす彼女の前にはC定食、さらにはデザー

トに杏仁豆腐までついている。周りを見回すが、空いている席はいくらでもある。むしろ食堂内にいる人間は僕と目の前の彼女、そして暇そうにぼんやりしている食堂のおばちゃんだけである。

何だこの子。

もしかして素うどんをすすっている僕に対して豪勢な食事を自慢でもしたいんだろうか、という僕の予想は、「偉大なる神ウーヌス、ドウオ、トレース、クアットウオル、クイーンクエ、セクス、セプテム。今日も私に与えたもうたささやかな糧に感謝いたします」という彼女の唱える食前の定型文によって強化された。

「定食に杏仁豆腐がささやか、だと？ 嫌味だろうか、この女郎。メラツと燃えそうになった僕の怒りは、しかし「わ！ 何そのメニユー！」と、如何にも今気づいたと言わんばかりの大げさな彼女のアクションによって封殺された。

「おうどんが三つだけなんて見たことも聞いたこともないよ！ しかも具なし！ どうしたの？ 何かのおまじない中？」

面白いモノ見つけた、と全力全開で訴えかけるその笑顔をまじまじと眺める。

少し低めの鼻に小さめの口、クリンと丸い目は笑顔の見本カタログのように輝いている。赤茶色の髪の毛は首の後ろにかかるくらいのショートカット。背の高さはどのくらいだろう。座っているのによく分からないが、僕と同じくらい。つまり一メートル六十をほんの少し超えるくらいだと思う。制服のタイの色から僕と同年、二年生だと分かるが、それにしてもはえらく童顔な女の子だった。

間違いなく、全く見覚えのない子だ。

「えーっと……見つめられるのはいいんだけど、何か反応が欲しかったり……」

黙ったままだ見つめている僕の視線に耐えかねたのか、その子は少し困ったように眉根を寄せておずおずと言った。

「あー……」一瞬何と言っているのか悩む。「君、誰？」

結局あきらめて、僕は率直にそう尋ねた。初対面の人間にわざわざ

ざ話しかけるといふことは何か用があるということに違いないし、何か言つて追い払うよりもうどんを食べる間くらいなら話に付き合つた方が手間も省けると思つたのだ。

しかしそれに対して、彼女は心底心外だと言つるように口をへの字に曲げ、両腕を振り上げた。

「ちよ、ちよつと！ 本気で？」  
ん？

慌てたよつなその反応。ピンとくる。どうやら初対面じゃなかつたみたいだ。

「私だよ！ 私！ 紀国歩！ きのくにあゆみ さつきまでおんなじ教室、しかも隣の席で授業受けてたじゃないの！」

目を三角にして肩を怒らせる彼女は、どうやら僕のクラスメートらしい。如何にも気分を害しましたとばかりに口をとがらせている見たところおそらく本気で怒っているわけじゃなく、そういうポーズをしている部分もあるんだろうけど。

まあ何にせよ、こういう場合に僕が返す答えは決まっている。

「ごめん。僕、健忘症の気があるんだよ」

いつもの定型文を口先に乗せて、僕は申し訳程度に頭を下げた。

どうやら彼女は去年一年間も僕のクラスメートだったらしく、その分まで含めてしばらく機嫌を低空にて彷徨わせていた。が、どうも彼女は怒りを長続きさせられないタイプのもので、僕が素うどんの二杯目に取り掛かる頃には、何事もなかったかのようにタルタルソースの乗つかったエビフライをばくついていた。

「うーん、相変わらずこのエビフライは絶品だよ！」

まるで僕に見せつけるように食べている、というのはうどんの味に飽きてきた僻み根性が見せる偏見だろうか。二杯目のうどんに取り掛かつた僕は、悪あがきのように刻みねぎをまんべんなく散らした。

「いやあ、それにしてもまさか名前も顔も覚えられてないなんて

ねえ。確かに直接お話ししたことはあんまりなかったとは思っ  
どさあ。一年以上おんなじ教室で切磋琢磨したつてのに。これはイ  
ジヨーだよ、イジヨー。歩ちゃん、カナシ なあ」

屈託なく笑う彼女は、きつといい人なんだろう。普通自分の存在  
を忘れていた人間のの前では、こつも笑つていられないものだ。

「それに関しては謝るよ」

「うん、別にヨウ君に悪気があつたわけじゃないつてのは分かっ  
てるからいいんだけどさあ。というかあれだよ、あれ。前々から思  
つていたんだけど今日歩ちゃん確信したね。ヨウ君はもっとクラ  
スメートとのコミュニケーションを大事にすべきだよ。私ヨウ君が  
授業で指名された時以外に話してるの、見たことないもん。違う？  
この学校で誰かとおしゃべりしたこと、ある？」

そんなことはいちいち覚えていないけど、彼女がそう言うのなら  
そうなのかもしれない。少なくとも現在僕の脳内に誰かと話してい  
る自分の姿は浮かんでこない。もっともそういつたことに関する僕  
の記憶力は、パリパリに乾いた犬のうんこ並みにあてにならないの  
で何とも言えないのだけれど。

二秒ほど頭をひねつてから結局面倒になつて、僕は「どうだつた  
かな」なんて玉虫色の答えを返した。

「それで？ わざわざそんなことを言うために僕の前に座つたわけ  
じゃないんだろ？ 用件は何なのさ？」

「はい！ それだよ、それ！」

なぜか鬼の首を取つたかのように彼女はテーブルを二度、バシン  
バシンと引つ叩いた。

「さつさと私の用事を済ませて話を切り上げようつて意図が明け透  
けすぎるよ！！ 無駄話しようよ！ もっと人生に余計な彩りを添  
えようよ！」

そうは言つても、彼女曰く同級生との会話経験が一度もないよう  
な僕が、気の利いた話なんて振れはずもなく、またそのつもりもあ  
んまりない。

「……君、エビフライ好きなの？」まあ、これが僕の精一杯だ。幸い彼女はそれで満足したらしい。

「うんっ！ 好きだよっ！ このエビフライは美味しいしね。ちよっと食べてみる？」

「いや、いらナイよ」

「そっか。ちなみにヨウ君は好きな食べ物とかってあるのかな？」

「うーん……どうかな。好きな食べ物はすぐには思いつかないな。今食べたくないものなら決まっているけどね」

「へへん、私分かるよ。おうどん、でしょ？」

正解だ。

舌がおかしくなったのか、さっきから何の味覚も伝わってこない。白い紐をすすり続ける機械になったような気さえしてくる。僕は一体いつからうどんをすすっているのだったろう。

いささか回りの悪くなってきた頭を振って、僕は三杯目のうどんに取り掛かった。

「ていうかどうしておうどん三つも食べてるの？」

「お腹空いてたんだよ」

「だったらおうどん三つじゃなくても三つ……」

「お金がないんだよ」

ベルトコンベアに乗せたような行先の決まりきった会話に、彼女はしばし何事か考えこんだ後、

「あのね、これはヒトリゴトなんだけどね。私、こつ見えてお料理作るのケッコウ得意なんだ。それでね。もしヨウ君さえよかつたら歩ちゃん、明日にでもお弁当作ってきちゃったりするつもりらしいんだけど……どうかな？」おずおずと質問を投げてきた。

何のつもりかと内心頭を傾げる。彼女によると僕は一年余りを共に過ごしたクラスメートらしいが、それもろくに会話もしなかつた程度の関係だ。そんな人間がいくらさもしい食事をしていたからと言って、わざわざ弁当を作ってくれるなんて。無条件でそんな都合のいい話を信じられるほど僕の脳みそは干からびていない。

「それはうれしいけど、僕は代わりに何をすればいいのさ」

つまり交換条件を持ちかけられたってことだろうな。弁当作ってきてやるから私の用事に付き合ってもらおうか、ってところか。報酬を先にちらつかせてから交渉に入るなんて、見かけによらずいぶんと計算高い子のようだ。

その意図を見破られた彼女は、ほんの少し顔をひきつらせた。

「えーっと、代わりに何をつて。そんなつもりじゃなかったんだけどなあ……。まあいいやつ。それじゃあね……。うーんっと、うーんっと、それじゃ、今度の休日に二人で遊びに行こうってのはどうかな？」

「ん……」

一瞬言葉に詰まってしまふ。

「今度の休みか……」

と考え込んだ僕の姿に何を思ったのか、彼女はわたわたと手を振って、

「あ！何か用事があるんだっいたらいいんだよ！ 言ってみただけだから。うん、言ってみただけ。ヨウ君が普段どんな遊びしてるのか、なんてちょっと気になっちゃったりしたただけだからっ！」

そうフォローをいれた。

「用事つてわけじゃないけどさ」

「ないけど……？」

「うん。まあつまり。しばらくの間、ちょっと忙しくなるかもしれないんだよ」

お茶を濁す僕に彼女は納得していないようだったが、口をつぐんだままうどんをすする僕の姿を見て、どうやらそれ以上話は聞けない雰囲気を感じたらしい。彼女は「そうなんだ」と追求するのをあきらめた。

「悪い」

言って最後に残ったうどん出汁を飲み込むと、僕は席を立った。

「ごちそうさま。……それじゃ、また」

「ええ？ 嘘！ 行っちゃうの？」

素っ頓狂な大声をあげた彼女は、箸でつまんでいたコロッケのかけらを放り出して、トレイを両手に食器返却口へ行こうとする僕の腕にすがりついた。

「ちよつとつとつ！ 待つて待つて！ もうちよつとだけお話に付き合つてつてば！ 明日のお弁当の事とか他にも色々聞きたいことがあるんだよう！」

意外と力が強い。最初からそのつもりもないけど、振りほどくこともできない。結局僕は引きずられるまま、元の席に着くことになった。

「一緒にご飯食べてたのに放置されそうになるなんてまさかまさかだよ！ ヨウ君ツメタイ！ ツメタスギだよ！ 新種の杉でも発見したのかよつてツツコンじゃうくらのツメタスギだよっ！」

憤懣やるかたなしといった様子の彼女は、自棄になったように白米をかきこんでいる。全くもって理不尽な怒りだ。しかも意味が分からない。

僕はため息を吐いて我が身の不運を呪った後、彼女に尋ねた。

「それで？」

「何だよ何だよ！ 私の事なんてドーセドーセ！」

聞こえちゃいない。

このままソツと帰っても気づかれないような気もしたが、それによつて巻き起こる明日からの面倒を考えるとそつという気にもなれない。心の中でもう一度ため息を吐いて、僕は少し待つことにした。

さっきの様子からして、彼女の怒りはすぐにおさまるだろうし。

という僕の予想通り、彼女の眉と地面のおりなす角度が鈍角に落ち着いたのはそれから三十秒もたないうちの事だった。

「それで。聞きたいことつて何なのさ？」

早速とばかりに切り出した僕の前で、彼女は肩を落とした。

「うつうつ……。なんだろう、すごい敗北感だよ」

「敗北感？」

「ハア……。うん。何でもないんだよ。うん。気にしないで、大丈夫だから。……とりあえず、そうだ。メイワクってわけじゃなさそうだし、お弁当は明日作ってくることにするよっ。うん、決めただからね、えっと、その代わりに歩ちゃんの独占取材に付き合ってもらってそんなコウカンジョウケンはヨウ君的に……。アリかな？ ナシかな？」

「取材？」

また変な言葉が飛び出してきたと、思わず聞き返した僕に対して待ってましたとばかりに彼女は食いついた。

「うん、レッツ取材だよ！ ヨウ君は知らないかもだけど、歩ちゃんは新聞部不動のエースなのだよ！ これでも去年は一年生にして七曲中等学校新聞の一面を飾った回数、我が部内でぶっちぎりの一番手だったんだから！」

「すごいでしょ！」と胸を張る彼女だったが、そもそも僕は七曲中等学校新聞なるものの存在すら今知ったので何とも言えない。とりあえず、「ふーん」と相槌を打っておく。

「と、いうわけでヨウ君にゼヒゼヒ取材したいところなんだけど、いいかなっ？」

「……答えられないことは答えないけど、それでも構わないなら曖昧な僕の答えに「ヨシッ！」と彼女は腕まくり。トレイを横に寄せて、どこからかメモとペンを取り出した。この間わずかコンマ二秒。新聞部不動のエースの名は伊達ではないらしい。

「ではでは！ まず最初の質問からね！ んっつと……。ヨウ君の名字の海月なんだけど？ 海月って……。もしかしてあの『海月』？」あの『海月』とは何のことか。なんて無駄なことは聞かない。この極東行政区画において、いや、間違いなくこの世界において、『海月』というのは特別な意味を持っているからだ。

この世界。

そう、この世界だ。

ご存じのとおり、ウーヌスとドウオの作り上げた三千世界の一つ。

それがこの世界。

この世界は一つの大陸と、その少し東に浮かぶ弓状の列島。そしてそれを取り囲む大洋によって構成されている。世界の形はおよそ直径二万キロメートルの球状。そのうち僕たちが普段目になっているのは地面および海面から上の半球、つまりはドーム型の世界だ。底面全体、およそ三億平方キロメートルの四分の一ほどの広さの大陸、および大陸の十分の一ほどの広さの弓状列島は、その真ん中に鎮座している。球の外側に何があるのか。また、空に映る太陽や月、星々の輝きは一体何なのか。それを考えることは、この世界の人間には許されてはいない。

そんな世界にものがたり僕は生きています。

こんなこと、この世界に住んでいる人間なら箸も使えないような歳の幼児でさえ知っている常識ってやつだ。

「あの『海月』というのが、七百年前にいた海月桔梗の『海月』を言ってるんならその通り。僕は彼女の遠い子孫ってやつだね」

頬杖ついてそう返した僕に、彼女は目を輝かせた。さもありません。極東行政区画に住む人間にとって、海月桔梗というのはいわゆる英雄の名前というやつなのだ。

「やったやったやったよ！　すごいすごい！　やつぱり歩センサーの目は確かでした！　一目見た時からヨウ君はタダ者じゃないってワタクシそう信じておりましたとも！　みんなから白い目で見られながらもヨウ君タダ者じゃない説を唱え続けて苦節四百日！　今まさに歩センサーの努力は実を結んだのですっ！」

だから彼女のこのハイテンションもまあ、不思議ではない。

何やら失礼なことを言われているが流すことにする。というか、目の前の彼女が腕をぶんぶん振り回すので、危なくてしょうがない。「それでそれで？　あの『海月』の一員であるヨウ君が、どうしてこんなひなびた町のこんなひなびた学校に通っているのかな？　トクシュニウム？　センニユーソーサ？　ハカイコーサク？　それともそれとも、もしかしてこの町に何かヤバげな魔物でも潜伏してる

とかかなくなつ？ それってそれって大変だよな？ この町のピンチってやつ？ 何か私に手伝えることがあつたらいいんだけど、どうかな？ そうだ！ この際だから二つ目の質問もいっちゃうけど、三日前の湾岸工業区画の三番工場爆発事故は魔物の仕業だったり？ もうもう三つ目いっちゃおうか！ 昨日の夜ヨウ君がボロ布まとった女の人背負つてるとこ見ちゃったんだけど、これって何かカンケ―あつたりするの？」

彼女の興奮は止まらない。というかやかましい。しかも最後の質問は聞き捨てならない。彼女を家に運び込むまでのほんの十分余りの間に、その現場を見られていたとは予想外だ。しかもそれが同じ学校と同じクラスの女の子だっていうんだから、何やら作為的なものを感じる。

どういうことだろう、と頭を悩ませ。しかしすぐに思考を放棄した。

所詮は些末事だ。

枝葉末節極まれり。

ほんとにね。

不毛。

「期待に応えられなくて悪いけど、僕はもう『海月』とは関係ないよ。十年以上前に家を出されたからね」

だけど僕は正直に答えることにした。

些末事に過ぎなくてもほんの十分間の偶然に遭遇したこの子の運命は、面白いかもしれないから。

この世界にいい花を添えてくれる存在になるかもしれないから。

だから僕は正直に答えることにした。

背を伸ばし、初めて彼女の目を見つめる。

「だから僕がこの町に住んでいるのにもこの学校に通っているのにも『海月』は関係ない。もちろん魔物の影なんて知らない。三日前の湾岸工業区画の三番工場爆発事故だっけ？ そんなこと今初めて聞いたし、昨日のあれだって、ほんとにただの偶然だよ。道で意識

を失って倒れていた女の人を介抱するために運んでいただけ。僕の同居人にそういうの、得意な人がいるから。なんだか訳ありっぽかったし、事情を聞くまでは病院に連れて行かない方がいいかと思っ  
て。ただそれだけの事だよ」

そこまで言っつて、僕は一度水で唇を湿らせた。

少し話し過ぎた気もする。

だけど嘘はついていない。

一つとして、嘘はない。

一息ついて、僕は目の前の彼女の様子を窺ってみた。彼女は何やら気落ちしているみたいだった。それが『海月』と僕がつながっていないという期待外れによるものなのか、それともまた別の要因があるのかは、神ならぬ僕には分からないけど。

「え、えっと。……まずはその、ゴメンナサイ。ひどい事聞いちゃ  
つて」

しばらくして頭の中身を整理し終えた彼女は、そう言っつてペコリと頭を下げた。彼女が一体どの質問に対して罪悪感を持ったのかは分からなかったが、わざわざ聞くのも面倒な僕はただ黙って顎を引いた。

「その女の人は、えっと……どうなったの？」

うっつて変わっつておずおずと聞いてくる彼女は、本当に堪えているようだった。怒りはすぐに忘れても、こういう感情は簡単に流せな  
いらしい。損な性分だ。

「今朝家を出るときには、まだ目を覚まして無かったよ。まあ身体的には何の問題もないそうだから、心配はいらないと思うけどね」

「うん」

「そんなわけで、これから少し忙しくなるかもしれないってわけ」

「うん……そっか。うん。……うん。分かったよ。もう大丈夫。大丈夫。よし、大変みたいだししょうがないよね。そうだ、私にできることがあったら何でも頼っつてね。さっきも言っつたけれど、私料理にはちょっと自信アリだからさー」

そう言つて、少しぎこちないけれど彼女はしっかりと笑つてみせた。

「それじゃ一つ質問、いいかな？」

「うん？ 何だい何だい？ 歩センサーに何でも聞いてみたまえ！」

「三日前の事故つて、何か不自然なことでもあつたの？」

彼女が魔に関係あると睨んだその事故。その理由が何なのかは、ほんの少し気になった。

些末事にも満たないことだけど、なぜか。

そう、なぜか気になった。

「う〜ん……そう来ますか……」彼女は少し困つたようにそう唸り、

「なんていうかね、何にも分からないの」

「と、言つと？」

「えつとね、えつとね。そんなに大した爆発事故じゃなかったのは確かなんだよ。警察庁も消防庁もすぐに帰つちやうくらいいの。もちろん退魔庁なんて影も形も見当たらなくつて。普通だったらそういう場合つて、原因は何なのか、とか被害状況はどうなのか、とかすぐに分かつちやうなだけだね。えつと。なんでかつて言つと、隠す人がいないから。そんなちつちやな事件をわざわざ隠す人、いないもんね。だけど三日前の事故は……」

「誰かが何かを隠してること？」

「ううん！ 違うのっ！ 誰かが隠し事してるかなんて、そんなこと私には全然わかんないけど、でもでも事件のことが何も見えてこないのは確かだ。それで………何ていうかちよつと変だなつて。ただそれだけ」

彼女は困つたように眉を八の字にさせた。

なるほど。それは確かに面白い、かもしれない。つまらない小さな事故が、なぜか隠されている、かもしれない。確かなことは何一つないけれど、何。その方が僕好みの展開だ。

知らず、僕は笑つていた。

「ありがとう。楽しい話が聞けたよ」

今度こそ僕は席を立った。

「あ！ ちよつとちよつと！ あのあの、調べるんだったら優秀なガイド兼情報収集役がここにいるよっ！ 今なら大安売り！」

胸を張って自分を指差す彼女。

「ああ、うん。何かあったら手伝ってもらっよ。たぶん、おそろく、きつと」

「そんなこと言って！ ぜーったいに私の事なんか忘れちゃうんだからダメッ！ ヨウ君のことなら、歩ちゃんは何でもお見通しなんだからねっ！ だから、えつと。……そうだ！ 携帯通信機もつてる？ 番号交換で連絡取るようにしよっ！ 三日前の事故についての情報共有義務化条約！ はい、テイケツテイケツ！」

彼女はポケットからゴテゴテとストラップをつけた携帯通信機を取り出して、何やら操作を始めた。

「じゃあね、こつちからかけるからヨウ君、番号をどうぞっ！」

「えつと確か……」

曖昧な記憶のままに番号を伝えたが、どうやら正解だったらしい。僕のポケットから軽快な電子音が流れてきた。

「よしつと！ ……えへへ。これでいつでもお話しできるねっ！ それじゃ、登録しておいてね。あ、あと爆発事故の調査、一緒に頑張ろうねっ！ それとそれと……そうだ！ 今日付き合ってくれてどうもありがとう！」

大きく手を振る彼女に背を向けて、僕は返却口へと歩を進めようとして、

「あ、そうだ！ 最後にイツコいいかなっ？」

仕方なく振り返った僕に対して彼女が投げた質問は、

「えつと。ヨウ君がね、おうどん食べ終わった時に言った『ごちそうさま』って、どういう意味かなっ？」

僕の返した答えは、ここでは語らない。

どちらにしても些末事だ。

ほんとにね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4634z/>

---

二千九百九十九番目の物語

2011年12月17日01時47分発行